

ながの学ことはじめ—信州名称考

石澤 孝

I はじめに

初めて出会った人に出身地を訪ねられた場合、まずは県名を答えるのが普通である。しかしながら、長野県の中信地方出身者などからは「長野」ではなく「信州」との答えが聞かれることが多い。長野県に関することについて県名の「長野」がつけられることが多いのは当然のことであるが、翻ってみるとわれわれの周りには、「テレビ信州」、「信州味噌」など「信州」とつけられた名称が多くみられる。

長野県に立地する国立大学の名称にも、本部所在地の「松本」や県名の「長野」ではなく「信州」がつけられている。このことは、全国的にみて実に不思議なことなのである。そこで本稿では、なぜ名称に「信州」がつけられたのかについて検討を加えてみたい。またこのことを踏まえて、長野県における市町村の名称の成り立ちの一端について考えてみたい。

II なぜ「信州」が用いられたのか

1. 国立大学の名称

戦後、学校教育法により新制国立大学が新設された。そのうち単科大学およびこれに類する大学¹⁾以外の複数学部からなる国立大学は、奈良県を除く全国の都道府県に一つずつ計46大学²⁾設けられた。これらの新制大学の名称には、原則として本部が所在する都道府県名または都市名が冠された。それらの多くは都道府県庁所在地に本部が置かれたため、その名称が冠される大学が多い(第1表)。

ところで、都道府県名と都道府県庁所在地の名称が異なっているのは、北海道(所在地、札幌市)、岩手県(同、盛岡市)、宮城県(同、仙台市)、茨城県(同、水戸市)、栃木県(同、宇都宮市)、群馬県(同、前橋市)、埼玉県(同、浦和市)、神奈川県(同、横浜市)、石川県(同、金沢市)、山梨県(同、甲府市)、愛知県(同、名古屋市)、三重県(同、津市)、滋賀県(同、大津市)、兵庫県(同、神戸市)、島根県(同、松江市)、香川県(同、高松市)、愛媛県(同、松山市)、そして沖縄県(同、那覇市)の18道県を数えるが、これらの道県においても道県名がつけられることが多く、県庁所在地以外の彦根市に本部が置かれた滋賀大学でも県名が冠されている。都市名がつけられたのは旧制帝国大学を母体とした名古屋大学をはじめ、宇都宮大学、横浜国立大学、金沢大学、神戸大学の5大学にすぎないのである。

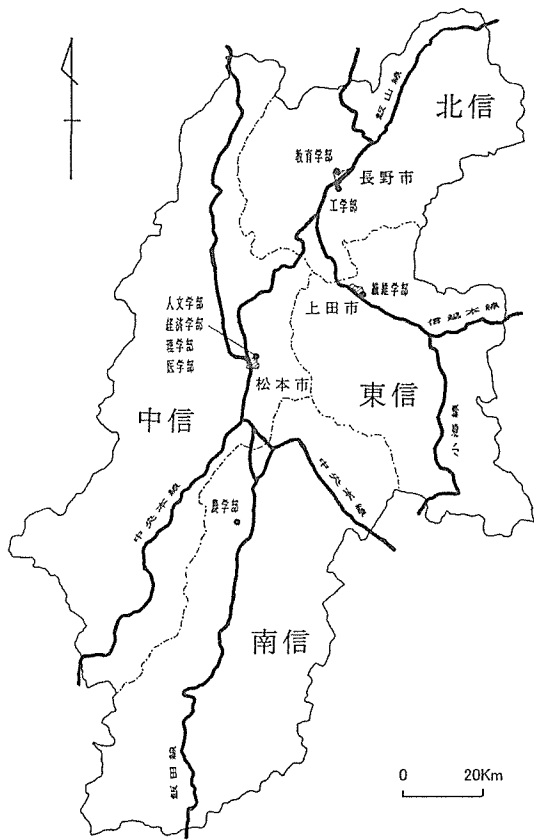
第1表 国立大学の名称（単科大学およびこれに類するものを除く）

大学本部所在地	地方名		都道府県名	所在都市名
	都道府県名と都道府県庁所在地	その他		
都道府県庁所在地	同一	九州大学	秋田大学, <u>山形大学</u> , 福島大学, 東京大学, 千葉大学, 新潟大学, 富山大学, 福井大学, 静岡大学, 岐阜大学, 京都大学, 和歌山大学, 鳥取大学, 岡山大学, <u>山口大学</u> , 徳島大学, 高知大学, 佐賀大学, 長崎大学, 熊本大学, 大分大学, 宮崎大学, 鹿児島大学	
	異なる	東北大学	北海道大学, 岩手大学, 茨城大学, 群馬大学, 埼玉大学, 山梨大学, 三重大学, 島根大学, 香川大学, 愛媛大学	宇都宮大学, 横浜国立大学, 金沢大学, 名古屋大学, 神戸大学
道府県庁所在地以外の都市		信州大学 琉球大学	滋賀大学, 大阪大学, 広島大学	弘前大学

全国大学一覧による。なお、**太字**は2つの都市にキャンパスが分散している大学、太字下線は3つ以上の都市にキャンパスが分散している大学。なお、東京医科歯科大学、東京農工大学、東京芸術大学、東京工業大学、一橋大学、京都市芸大学などは複教育学部からなるものの、単科大学に類するものとして表から省いた。また、男女共学ではないお茶の水女子大学、奈良女子大学も同様に省いた。

いずれにしても、多くの国立大学の名称には都道府県名または都市名が冠されたのだが、その例外が東北大学、九州大学、琉球大学、そして信州大学の4大学である。東北大学と九州大学は旧制帝国大学を母体としており、琉球大学は当時の米軍統治下の琉球列島国民政府によって設立されたのでその名称の由来にも納得できるであろうから、唯一例外的といえるのが信州大学の名称となる。

それでは、なぜ「信州」という名称がつけられたのであろうか。キャンパスが県内各地に分散している（第1図）からだという考え方もあるかもしれない。しかしながら、多くの新制国立大学は旧制大学、旧制高等学校、旧制専門学校などを統合して成立したものであるから、設立当時はキャンパスが分散しているのが当然なのであった。近年においても、信州大学のほかに山形大学や茨城大学において、キャンパスが3都市以上にわたって分散して立地している。これらのことを考えると、分散していたことだけが第一の理由とは考えにくいのである。つぎに考えられる要因は、前身となった学校名称である。そこで、この学校名称について検討してみる。

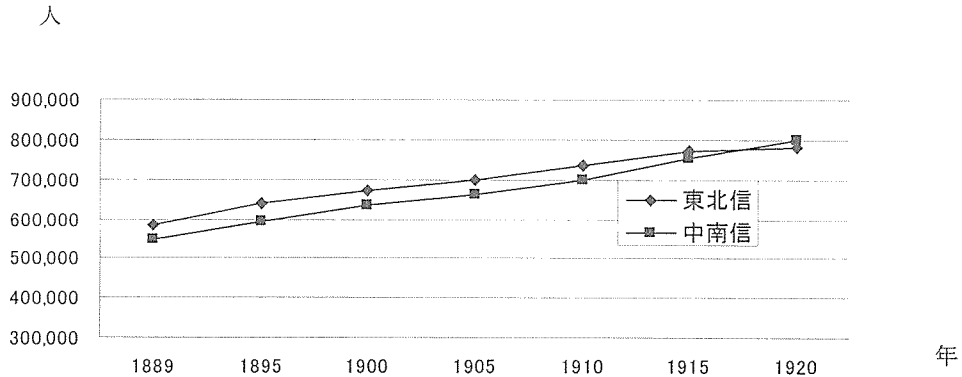


第1図 長野県と信州大学の配置 (石澤, 1994より)

信州大学は1949年に当時の「松本医学専門学校・松本医科大学」, 「松本高等学校」, 「長野師範学校 (男子部, 女子部)・長野青年師範学校」, 「上田繊維専門学校 (旧上田蚕糸専門学校)」, 「長野工業専門学校 (旧長野高等工業学校)」, 「長野県立農林専門学校」を母体とする医学部, 文理学部, 教育学部, 繊維学部, 工学部, 農学部の6学部からなる新制大学として発足している。「松本」がつく名称が2校, 「長野」がつく名称が3校, 「上田」がつく名称が1校であり, 「長野」が最も多い。長野県に立地していること, また「長野」がつくものが半数を占めていたことを考えると「長野大学」, 本部が松本市に置かれていることを考えると「松本大学」となってもよさそうなものだが, そうはならず「信州大学」と命名されたのである。

2. 長野と松本

巷には, 長野県の成立経緯が関係している。つまり, 現在ある長野県は1876年に当時の長野県 (東信・北信地方) と筑摩県の大部分 (中信・南信地方) が統合されて成立したのだ。しかも, 松本に県庁のあった旧筑摩県の部分の面積は旧長野県より広く, また人口はほぼ等しい。だから, 中南信地方の人々は「長野県」という名称よりも「信州」という名称に親しみを感じている。東北信地方の人々もこのことに配慮して「長野」という名称を使うことにはこだわらないのであるとか, その結果として県庁が県域の北に偏って立地しているからだとかいうことが, よくいわれている。しかしながら, 明治期初頭にはこのような府県の合併は全国的に行われていたのであり, たとえば山形県は「山形県」と「酒田県」と「置賜県」が, 新潟県は「新潟県」と「柏崎県」が, 石川県は「金沢県」と「七尾県」が, 静岡県は「静岡県」と「浜松県」と「足柄県」の一部が統合されて成立しているのである。長野県同様に地域的対立が完全に解消されているとはいえ



第2図 東北信地方と中南信地方の人口の推移

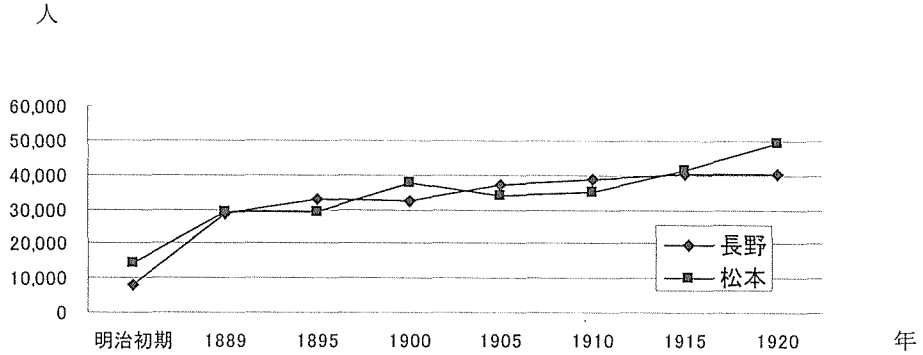
資料：長野県統計書

ないものの、山形県や新潟県では、県域のことをさして旧国名の「羽州」や「越後」を多用するとはあまり聞かない。

また、多くの県では県域のほぼ中央に県庁が立地していることは確かであるが、福島県、福井県、奈良県などでは県庁が県域の北部に偏って立地している。にもかかわらず、これらの県においても県の名称が用いられることが多いから、単に統合されたことだけが、また県庁が北に偏って立地していることだけが理由とは考えにくいのである。そこで、それぞれが地域の核となる都市を有するほぼ同規模な地域が統合（合併）された場合には、統合の混乱を避けるために新しい名称が考案される、との仮説において、信州大学の名称についての検討を行ってみた。

旧長野県に相当する東北信地方と旧筑摩県の長野県部分に相当する中南信地方、そしてそれぞれの中心都市長野と松本の、明治から大正期にかけての人口の推移を示したのが、第2図と第3図である。1889年から1915年までは東北信地方の人口がやや上回っていたが、1920年には逆転している（第2図）。1920年の国勢調査によると、東北信地方の人口は741,322人（県に占める人口47.4%）、中南信地方の人口は821,400人（県に占める人口52.6%）であった。とはいうものの、この期間を通じて、東北信地方と中南信地方の人口はほぼ拮抗していたといってもよいだろう

つぎに、長野と松本の人口の推移をみてみよう（第3図）。長野県町村誌によると、明治初期においては松本の人口（14,467人）³¹が圧倒的に多く、長野の人口（8,073人）は、上田（8,759人）や松代（8,415人）をも下回っていた。市町村制が施行された1889年³²においても、やはり松本が長野の人口をやや上回っていた。明治期末期になってようやく長野の人口が松本を上回ったが、大正期にはいって再度逆転している。初めて国勢調査が実施された1920年にも松本の人口（49,999人）の方が多く、長野（37,308人）は平野村（44,278人；現岡谷市）の人口をも下回っていたのである。



第3図 長野と松本の人口の推移

資料：長野県統計書，長野県町村誌。なお，明治初期における松本の人口は，当時の北深志町（8,774人）と南深志町（5,693人）を合算した。また，1889年以降の人口は当時の行政区画における人口である。

以上みてきたように，わが国における様々な近代制度が固まった明治から大正期においては，長野と松本，そしてそれぞれを中心とする東北信地方と中南信地方の人口はほぼ等しく拮抗していた。より厳密にいうと，県下第一の都市は長野ではなく松本だった時期もみられたのである。とすれば，当時県下第一の都市と自負していた松本の人々が「長野」に代わる名称を考えようとしたのも想像に難くはない。このことは実際，何度も生じた県庁の松本移庁運動や分県運動という形でも現れている。

ところで，明治後期の長野師範学校において「信濃の国（浅井冽作詞；1899年，北村季晴作曲；1900年）」が歌われていた。長野県の地理・文化を題材にしたこの歌のタイトルが「長野」ではなく「信濃」であることにも興味深いが，後に師範学校の卒業生により県下の学校においても広く歌われることになったのは当然のことである。このことが，「信州」という名称を広めた一つの要因になったのではなかろうか。

すなわち，長野県においては，県域が統合されて以降も長野を中心とする地域（東北信地方）と松本を中心とする地域（中南信地方）の人口がほぼ等しく，さらに県庁の位置をめぐって対立していた。このため，旧長野県をイメージする「長野」に代わる新しい名称が探されていたが，そこへ「信濃の国」が広く県下で歌われはじめた。このことや旧国名が「信濃」であることが考慮されて，県内を広くさす呼称として「信州」という名称が定着したのである，と考えられるのではないだろうか。新制国立大学の発足時は最後の分県運動が生じた時期とほぼ一致しているから，以上のような仮説にしたがって考えると，名称が長野や松本ではなく信州大学と命名されざるを得なかったことが納得できるのである。

第2表 長野県における市町村名称の変遷

時 期	市 町 村 名
明治初期，市町村制施行時の町村とともに確認される名称 (40)	小海， <u>北相木</u> ， <u>南相木</u> ， <u>白田</u> ，小諸 上田，丸子， <u>武石</u> ， <u>和田</u> ， 下諏訪，(上)諏訪， <u>宮田</u> ，飯島，高遠， 飯田， <u>清内路</u> ， <u>根羽</u> ， <u>上</u> <u>奈川</u> ，(木曾)福島， <u>王滝</u> ，山口，麻績，生坂， <u>波田</u> (<u>波多</u>)，塩尻，大町， <u>松川</u> (村)，池田， <u>上山田</u> ， <u>大岡</u> ，坂城 (坂木)，戸倉，須坂，小布施， 中野，飯山，長野，牟礼， <u>鬼無里</u>
市町村制施行時の町村に確認される名称 (35)	<u>川上</u> ， <u>南牧</u> ，御代田， <u>北御牧</u> ， <u>青木</u> ， <u>原</u> ，富士見， 箕輪， <u>南箕輪</u> ，伊那， <u>下条</u> ， <u>泰阜</u> ， <u>喬木</u> ， <u>大鹿</u> ， <u>榑川</u> ， <u>木祖</u> ， <u>日義</u> ， <u>開田</u> ， <u>三岳</u> ， <u>大桑</u> ， 松本， <u>本城</u> ， <u>坂北</u> ， <u>坂井</u> ， <u>山形</u> ， <u>朝日</u> ， <u>安曇</u> ， 豊科，穂高， <u>八坂</u> ， <u>美麻</u> ，小谷 <u>三水</u> ，戸隠，小川
明治初期に確認されるが，市町村制施行時の町村に確認されない名称 (16)	軽井沢，望月， <u>真田</u> ， <u>岡谷</u> ， <u>辰野</u> ， <u>長谷</u> ， <u>阿智</u> (阿地)， <u>浪合</u> ， <u>平谷</u> ， <u>売木</u> ， <u>上松</u> ，明科，堀金， (信州)新，中条，野沢 (温泉)
明治初期，市町村制施行時の町村とともに確認されない名称 (29)	佐久 (市)，佐久 (町)，八千穂，浅科，立科， 長門，東部，茅野， 駒ヶ根，中川，高森，松川 (町)，阿南，天竜， 豊丘， <u>南信濃</u> 南木曾，四賀，梓川，三郷，白馬， 更埴，高山，山ノ内，木島平，栄， 豊野， <u>信濃</u> ， <u>豊田</u>

下線は、明治期以前からの単独のままの村。浪合村、平谷村のように一時合併して後に分村したものを含む。太字は、市町村制施行時以降若干の変更はあったものの、単独のままとみなせる町村。なお、地名に上・中・下や東・西・南・北がついている場合は同一の地名とみなした。

Ⅲ 地域社会の成り立ちと地名

それぞれが地域の核となる都市を有するほぼ同規模な地域が統合（合併）された場合には、統合の混乱をさけ、また地域的対立を解消するために新しい名称が考案される、との仮説が前章において立証されたことになる。さて、現在の長野県は120市町村から構成されているが、それらの多くは合併を繰り返しながら成立している。したがって、「信州」という名称が考案されたのと同様のケースもみられたはずである。すなわち、

地域の核となる町を中心に合併が行われた場合（多くの場合は編入合併）にはその名称がつけられるが、ほぼ対等の町村同士による合併の場合には様々な混乱を避けるために新しい名称が考案される、と考えることができる。とすれば、新市町村の名称から合併時における地域社会の力関係を探ることが可能になるのではないだろうか。ここでは、このことについて若干の検討を加えてみたい。

ところで、わが国においては二度の大規模な市町村合併が行われた。明治期の市町村制施行にともなう合併（明治の大合併）と、戦後におけるいわゆる「昭和の大合併」である。そこでまず、現在の市町村名が、明治初期（1893年頃より以前）、市町村制施行時（1889年）における町村名に確認されるか否かについて検討を加えた（第2表）。明治初期から全く合併しなかった町村を含め、40市町村（第1グループとする）⁵¹の名称が両時点において確認され、35市町村（第2グループとする）の名称が市町村制施行時の名称に確認された。両時点ともに確認されなかったのは29市町村（第3グループとする）の名称である。

なお、明治初期に確認されたが市町村制施行時には確認されなかった、すなわち明治の大合併時に一時消滅していた名称が後に復活したもの⁶¹として16市町村（第4グループとする）の名称がある。「上松」町の名称は、1922年に町制を施行したとき大合併時に称した「駒ヶ根」から復活したものである。同様に、「軽井沢」町の名称は1923年の町制施行時にそれまでの「東長倉」から、「岡谷」市の名称は1936年の市制施行時にそれまでの「平野」から、「（信州）新」町の名称は1954年の町制施行時にそれまでの「水内（久米路）」からの復活である。なお、「辰野」町の名称は1947年にそれまでの「伊那富」から、「野沢（温泉）」村の名称は1953年にそれまでの「豊郷」から改称されて復活し、「浪合」村と「平谷」村の名称は1934年の「波合」村の分村により、「売木」村の名称は1948年の「豊」村の分村により復活している。

1955年には多くの合併が行われたが、このときそれまでの「栄」から「中条」村の名称が、「中川手」から「明科」町の名称が、「鳥川」から「堀金」村の名称が復活した。また、1958年の合併によりそれまでの「長」から「真田」町⁷¹の名称が、1959年の合併によりそれまでの「本牧」から「望月」町の名称が復活した。また、1956年の合併により「会地」村と「智里」村に分離していた明治初期の「阿智（阿知）」村の名称が、1959年の合併により「伊那里」村と「美和」村に分離していた明治初期の「長谷」村の名称が復活している。

さて、明治期における人口統計には種々の制約があるため、昭和の大合併前後における地域社会の力関係に関する検討を行うことにした。昭和の大合併により新しい名称がつけられたのは第3グループの市町村であり、古くからの地域の呼称に基づく名称（佐久市、佐久町、南信濃村、信濃町など）、山や川の名称や立地に基づく名称（立科町、天竜村、南木曾町、東部町など）、合併村の数や町の発展を念じた名称（四賀村、三郷村、豊野町、栄村など）、合併町村や地域名を合成した名称（長門町、更埴市、高山村、豊田村など）などがある⁸¹。それらのなかから、対等合併（それまでの市町村を廃し、

第3表 更埴市と佐久市における旧町村人口

新市名称	旧町村名称	人口	最大都市比	人口構成比
更埴市 1959年市制施行	屋城町	12,975 人	1.00	39 %
	埴生町	7,419	0.57	22
	稲荷山町	7,165	0.55	22
	八幡村	5,617	0.43	17
佐久市 1961年市制施行	野沢町	17,240	0.86	30
	中込町	13,989	0.70	24
	浅間町	19,931	1.00	35
	東村	5,669	0.28	10

資料：長野県勢要覧，国勢調査。なお，更埴市の旧町村人口は1958年4月現在，佐久市は1960年10月現在。

新たに設ける）により市制を施行した佐久市と更埴市を選び，合併直前における旧町村の人口について検討を加えてみた（第3表）。表に示されるように，両都市とも第2位地区の2倍以上の人口を有する飛び抜けた地区がみられなかったことがわかる。

ところで，第1グループに属する長野は，1897年の市制施行以降3度の合併を行っている。そのうち，隣接する地区を合併した1923年および犀川以北の村落を合併した1954年の合併は編入合併であり，篠ノ井市や松代町などと合併した1966年の合併は佐久市や更埴市と同じ対等合併であった。したがって，1923年と1954年の合併において長野の名称が存続したのには納得がいくが，1966年の合併においては新しい名称がつけられても不思議ではなかったといえる。しかしながら，合併直前における旧長野市の人口は新市の過半数を遙かに超え，第2位である旧篠ノ井市の人口の6倍近くを有する，他に比類なき都市（プライメートシティ）だった。すなわち，実質的な編入合併だった（石澤，1998）のであり，新市にも長野の名称が存続したのである。

以上，佐久市と更埴市，そして長野市の合併を検討したところ，新市町村の名称から合併直前における地域社会の力関係を探ることが可能になることが確認された。すなわち，新名称がつけられた場合の多くは対等合併であり，旧名称が存続した場合の多くは実質的な編入合併である，と考えることができるのである。

IV おわりに

地域の名称の成り立ちには興味深いものがある。本稿においては，長野県に立地する国立大学の名称に県名ではなく「信州」がつけられていることに関して，それぞれが地域の核となる都市を有するほぼ同規模な地域が統合（合併）された場合には，統合の混乱を避けるために新しい名称が考案される，との仮説を置いて，検討を加えてみた。そ

の結果、わが国における様々な近代制度が固まった明治から大正期において、長野と松本、そしてそれぞれを中心とする東北信地方と中南信地方の人口がほぼ等しく拮抗していたこと、県下第一の都市は長野ではなく松本だった時期がより長かったということが明らかになった。これらのことに付随する様々な混乱を避けるために、「長野」に代わる名称として「信州」が用いられることになった。しかも、信州大学の名称が検討されていた時期には、県内では最後までいえる分県運動が生じていた。したがってなおさら、県名の「長野」や本部所在都市の「松本」ではなく「信州」と命名されざるを得なかったと考えられるのである。

さて、ほぼ同規模な地域が統合されたとき、新しい名称が考案されることが多いのである。換言すれば、統合された地域に新しい名称がつけられたときには統合以前の地域間にさほど規模の差異がみられなかったということになる。更埴市、佐久市とともに長野市を事例としてこのことを検討したところ、統合された地域の名称から、合併直前の地域社会における力関係の類推が可能になることが確認された。

文献

- 石澤 孝 (1995) : 信州大学の配置と入学者の空間構造. 信州大学教育学部紀要, 82, 83~91.
石澤 孝 (1998) : 『都市の成立と発展』 龍鳳書房
長野県 (1936) : 『長野県町村誌』
長野県 (1984) : 『長野県史 近代資料編』

注

- 1) 東京医科歯科大学, 東京農工大学, 東京芸術大学, 東京工業大学, 一橋大学, 京都工芸大学などは単科大学に準ずるものとした。また、共学でないお茶の水女子大学, 奈良女子大学も同様に考察から省いた。
- 2) 米軍統治下の琉球列島米国民政府によって設けられた, 沖縄県の琉球大学を含む。
- 3) 明治初期における松本の人口として, 当時の北深志町 (8,774人) と南深志町 (5,693人) を合算した。
- 4) このとき長野町は, 西長野町, 南長野町, 茂菅村, 鶴賀町のうち間御所と権堂, を合併した。一方, 松本町は, 北深志町, 南深志町のほか, 渚村, 白板村, 宮淵村, 蟻ヶ崎村, 桐村, 筑摩村のうち田川東, が合併して成立している。
- 5) 牟礼村は, 1890年に中郷村と改称しているから, 厳密には第4グループとすべきなのかもしれない。

6) 旧村名が復活したというよりは、全国に広く知られているものにちなんで改称されたといった方が正確といえる名称がある。たとえば、別荘地としての「軽井沢」、駅名としての「岡谷」、「辰野」などである。なお、注5) でふれた「牟礼」も住民の公募で決められたというものの、身近な駅名が無関係とはいえない。

7) 戦国大名真田氏の出身地で古くから真田郷と称されていたことから名づけられたといわれるが、旧長村役場の所在地は宇真田となっており、明治初期の名称が全く無関係とはいえない。

8) なお、第2グループにも新しい名称がつけられたものがある。たとえば「豊科」は(上・下)鳥羽村、吉野村、(成相)新田村、成相町村の読みの頭文字を合成して創られた名称である。このような新しい名称の由来については、紙面の都合上、別稿に譲りたい。

(2000年9月25日 受理)